

# 〈特集〉 国語科教科書の可能性

(論文)

## 理想の教科書は存在するか

岩 崎 淳

### 理想の国語教科書

齋藤孝の『理想の国語教科書』という本が刊行されたのは二〇〇二年のことである。この本が好評だったのか、翌年に『理想の国語教科書 赤版』が刊行され、二〇一二年には『理想の国語教科書 決定版』が刊行された。

この本にはさまざまな文章が収録されている。文章の選択には、当然だと思われるものがあり、一方で意外だと感じるものがある。後者の中には、単なる驚きの場合もあり、不賛成の場合もある。

「国語教科書の可能性」という言葉を目にしたとき、最初に思いかけたのはこの本のことであった。「理想」と冠している。

これが「理想」だとは思わない人も数多くいるだろう。一方で、三冊のシリーズが刊行されたのは、好評をもって迎えられたということ、支持する人が多くいたということの表れなのだろうとも思う。

「理想」かどうかということの前に、この本は教科書ではない。文部科学省の検定を受けていないという点ではもちろん、若干の解説がついてはいるものの、教科書の体裁すらとっていない。名文集の一種であり、初めから一般読者向けの単行本として企画されたものである。

現在の学校教育で使用されている教科書には、教材に学習目標が示され、学習の課題や学習活動等が設定されている。作者、筆者に関する解説があり、新出漢字や学習すべき語句に印が施

されている。その他に、スピーチや話し合いの活動を解説したページ、文法事項を解説したページ、伝統芸能を解説したページ、文章の書き方を解説したページ、その学年の学習者に向けた読書に関するページなどが取められている。

教科書は基本的に名文集という性質を有している。しかし、単なる名文集ではなく、文章だけを掲載しているわけでもない。むしろ、このことは、『理想の国語教科書』の編者も承知していることだろう。

ただし、国語教育関係者には自明のことであっても、一般人々には必ずしも認識されているとは限らない。このシリーズを見て、素直に「これが理想の教科書だ」と思う人もいるだろう。この題名を見てみると、いくつかが思い浮かぶ。

「理想の教科書」とは、誰にとつての「理想の教科書」なのか。現実の教科書とは、どのような存在であるのか。

理想の教科書は存在し得るのか。本稿では、そうしたことを考えながら、国語教科書の可能性を考えていきたい。

### 教科書を規定するもの——検定制度と学習指導要領

我が国で検定制度が行われている以上、検定に合格しなければそれは教科書ではない。教科書であるためには、検定に合格することが前提となる。

学習指導要領が教科書の内容を規定する。学習指導要領を具現化したものが教科書であるといえる。

「教科書がつまらないから、おもしろい授業が展開できないのだ」と教科書を攻撃する人がいる。そのような場合、教科書を難じる前に、それがもとの学習指導要領の内容に起因するものか、あるいは具体化のしかた（編集のしかた）に起因するものかについて考える必要がある。学習指導要領を読まずに教科書だけを論じても不毛な時間を重ねるだけである。

教科書の本質的な問題について考えるときに、学習指導要領と切り離して考えると、はなはだ偏ったことになる。同様に、学習指導要領の問題を考えるときには検定制度を無視して考えることはできない。

検定制度が日本の教育をゆがめているという主張がある。一つの制度が続く以上、長い年月の中には弊害が存することもある。長所と短所とを慎重に勘案し、必要があれば、修正したり改善したりしていくのが最良の方法である。

国家が教育について責任をもつというのは当然のことであり、教育内容に公的な機関がまったく関わらないことのほうが異常なことである。現実的な運営のしかたに問題があるのなら、それを正すべきである。「国が検定すること自体がおかしい」ということになる、すべては民間に委ねることになる。

教育は巨大な産業である。検定制度を廃して、質の向上を競争原理だけに頼った場合、どのような結果になるのかは容易に想像がつく。

どのような分野においても、チェック機能が働かないところでは、質の維持さえ難しく、やがて腐敗していく。それは、す

でに数多くの事例によって示されている。

### 教科書を規定するもの二——無償給与と広域採択

日本の義務教育課程では、教科書は無償で給与される。これについても賛否両論あり、有償化にすべきという主張がなされている。無償給与によって、検定強化、採択地域の拡大、発行者の限定が進んだと指摘されている。

製作と供給に関わる費用には上限が設定されている。ものを創りだすときに、資金が潤沢であれば、もつと良いものが創れると思うのは当然のことであろう。一方、ものを創るときに予算が存在し、その範囲内で考えていかなければならないこともまた当然のことである。

最低限の資金がなければ、ものを創りだすことはできないが、豊富な資金があれば良いものができるというわけでもない。費用と完成度とはある程度比例する。しかし、それはある程度までのことで、予算を二倍にすれば二倍の価値をもつ教科書が完成するというのではない。良質のものを生み出すのに不可欠なのは、優れた才能と努力を惜しまぬ情熱とである。制限を撤廃すれば良いものが創造できると思うのは幻想でしかない。

無償給与であるために、教科書は単一価格で設定される。単一価格であるから、同じ学年の同じ教科書なら、どの出版社の教科書でも同じ価格に設定されている。どの教科書が選択されても、児童・生徒の教科書代は、同一学年ならすべて同じになる。

広域採択制度によって、使用する教科書を地域ごとに決定さ

れる。採択権者は教育委員会である。公立の小学校・中学校では、各教員は、自分の使用する教科書を選択できない。

広域採択制度においては、全国どの学校においても使用できる教科書でなくてはならない。独自の工夫を凝らした教科書は、「くせのある」教科書として敬遠される傾向にある。仮にそれが優れた特長であったとしても、他の教科書会社からネガティブキャンペーンが行われ、そのように受け止められることはめずらしくない。

### 教科書を規定するもの三——指導者と学習者

独自の工夫を凝らしても、「くせのある」教科書として敬遠される傾向があることは先に述べた。このことについて、過去に次のような例がある。中学校のある教科書で、古典単元を組んだ際に、自然と人事の二つのテーマを立てた。自然では、『枕草子』の「春はあけぼの」の段と『徒然草』の「折節の移りかはるこそ」の段の春の部分を取録した。人事では『枕草子』の「はしたなきもの」の段と『徒然草』の「九月二十日ごろ」の段とを取録している。比較しながら読むことによって、それぞれの理解を深めようとするねらいとしているのだが、これはたいへんに不評であった。テーマの設定のしかたや章段の選び方に異議があったわけではない。章段の学習は単独で一つずつ終えていきたいという指導者が圧倒的に多く、教科書によって学習の方向性が示唆されるのは好まれなかつたのである。

学習活動の設定のしかただけではない。扱い慣れた教材を敏

迎する一方で、新しい教材を好まない教員がいる。新しいものが常によいとは限らないから、その教材が良いか悪いかということだけで判断するのなら問題はない。しかし、新しいということだけで好まない教員も少なからず存在する。教科書の可能性を狭めているのは、こうした教員の存在である。

むろん、一概に教員だけを責められない。教員が使いにくい教科書だと感じるのは、生徒の反応から感じ取ることも多いからである。生徒には、教員以上に保守的なところがある。教育についても、国語教育についても考えたことはないのであるから、それは当然のことである。自分のもつイメージから抜け出られなかったり、点数の取りやすいような学習を最上のものと考えたりすることはめずらしくない。

「近代文学名作冒頭集」として、Aの教科書が八作品、Bの教科書が二五作品を掲載していた場合、Bに対して批判的な意見が集まることがある。教えるほうも、学ぶほうも負担が大きいのである。Bの編集委員が「文体のサンプルとして数を多くしている。読書案内の役割も持たせている。暗唱させる場合は、選択させればよい」と言ったとしても、それをありがたがる教室ばかりではない。「教科書に掲載されているものは学習しなければならない」という保護者の声は教員以外の者が考える以上に大きいものである。そして、それは、「近代文学名作冒頭集」に限らない。古典の冒頭でも、故事成語でも、近代短歌でも、作文教材でも、音声言語学習の教材でも同じことである。そうした声に従っていたら、教科書は質量ともに貧弱

なものになっていってしまう。教科書の編集には、目に見えない敵と戦うという部分もある。

\*

以上のように、教科書は、外側からも内側からもさまざまな力によつてあり方が決められていく。良い教科書をつくれれば採用されるというような単純なことではない。適正な評価をするには、評価する側にそれだけの力量が必要である。自分が高くならなければ、何を見てもその美点がわからないのである。

#### 「国語表現」と「現代語」

平成元（一九八九）年版の高等学校学習指導要領において、国語科で「現代語」と「古典講読」とが新設された。当時の高等学校の国語科の科目は、この二科目の他「国語Ⅰ（必修）」「国語Ⅱ」「国語表現」「現代文」「古典Ⅰ」「古典Ⅱ」である。

各会社から出版された「現代語」の教科書は、大まかに二種類に分けられる。一つは、文章を並べてそれに学習の手引きを付したタイプの教科書で、仮にこれを「名文集型」と呼ぶことにする。もう一つは、話し合いや作文等の活動を示し、その方法を説明するタイプの教科書で、こちらを「マニユアル型」と呼ぶことにする。

興味深く感じられたのは、「現代語」の教科書が「名文集型」である場合、その教科書会社から出版されている「国語表現」の教科書は「マニユアル型」であり、逆に「現代語」の教科書が「マニユアル型」である場合、その会社の「国語表現」の教

科書は「名文集型」であることだった。

これは、新設された科目の教科書をどのように編集すべきかわからなかったからであるとか、各社の編集委員の発想が貧しかったからであるとかいうようなことではない。

先に述べたとおり、国語教科書は、基本的には名文集であるという性質を有している。これは、一つには「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」という言語の活動の中で、「読むこと」の指導の重点が置かれているからである。もう一つは、活動の指示や言語に関する事項の説明がそれほどページをとらないのに対して、説明文や小説等の教材を収録した部分は多くのページを必要とするからである。結果的に読み物集という印象が強くなる。

どのような文章をどのような順序で配するかというところに、編集委員の教育観が示される。そして、採録された教材に対してどのような課題を付けるのか、あるいは「聞くこと」「話すこと」「書くこと」などの言語活動や文法事項にどのような活動指示や解説を付けるのかというところに編集委員の力量が示される。

単純化して言えば、国語教科書の真の評価は「どのような文章を選定しているのか」ということと「どのような指導を構想しているのか（どのような課題や指示を提示しているのか）」ということの二つの観点からなされるものである。

国語教科書の可能性を考えることは、つまり、この二つの点の改善・改良について考えることに他ならない。

しかし、現実には、どのような文章が採録されているのかということにばかり目が向けられている。

教科書を手にとる人の中には、実際にその教科書で授業をしない人がいる。それはたとえば、保護者であり、教育関係のジャーナリストであり、国語資料集や参考書等の執筆者である。そうした人たちは、教材しか見ないものである。

実際に授業を行う指導者であっても、課題や指示をよく見ておくとはいえない。経験豊富な指導者であれば、自分のやり方を蓄積している。地域や学校によつては、マニュアルを独自に作成し、統一して指導するというように決めているところもある。いずれも教科書に設定されている学習の課題には依らない。このような人たちは、課題が教材の後のページに（目立たぬように）配置されているのならよいのだが、編集委員の特別なかけが前面に出てくると、わずらわしく感じるのである。

#### 使にくい教科書

古い教科書——たとえば坪内雄蔵の国語読本や西尾実の岩波国語などの教科書——に対して「これは優れた教科書である」という評価がなされることがある。一方、現在使用されている教科書に対する肯定的な評価はあまり耳にすることがない。それは、(実際に自分が使用する可能性のない)歴史的な資料として見る場合と(自分が使用している・使用する可能性のある)現実の教科書として見る場合の心構えの差に由来する。

なぜ教科書は使にくいと感じるのだろうか。それにはいく

つかの理由がある。端的に言えば、教科書がオーダーメイドではないからである。オーダーメイドではないから、自分が担当している学習者や自分の構想する授業との間に差が生じてしまう。

洋服を例にすると、二三歳から六〇歳までのどの人にも、ぴったりとした、満足のいく既製品の上着が存在するだろうか。肩の辺がきつい、袖が長い、色が明るすぎる、素材がしっくりこない……など何かしらの点で不具合のあるのは当然のことである。

教科書は自習書ではない。教員による指導を前提として作成されている。学習者が教科書だけで学習を進めようとしても、期待できる成果には限界がある。

担当する学習者に合わせて、指導者が適切に学習活動を設定していく。必要なら補助教材を用意する。学習者の実態を把握する力、それに合わせて適切な指導計画を立案する力、計画に従って授業を行う力など、指導者にはさまざまな能力が求められる。指導者の力量によって、教材から引き出される魅力もそして授業の成果も大きくかわってくるのである。

### 教材の力

指導者を触発して新しい授業を創造する。そのような力をもった教材が良い教材であり、そのような教材をいくつも収録した教科書が優れた教科書だと言える。

昭和末期の小・中学校の教科書における平和教材について、

戦争末期の日本国内で、年少者の視点から見た文章であることが共通しているという指摘があった。つまり被害者の視点からの文章に偏っているというのである。

戦争の悲惨さを教え、平和の尊さを訴える。そうした教育自体は重要なことであり、必要なことである。しかし、小学校高学年から数年間、毎年同じ内容の学習が続けられたら、学習者の反応はどのようなものとなるだろう。

稿者が担当している、大学の国語科教育法の「戦争文学教材と平和教材」という授業では「小学校から高等学校まで、どのような平和教育を受けたのか。それについてどのような感想をもったか」という調査を毎回行っている。大ざっぱにその傾向を示すと、「平和の良さを感じた」「教えられて良かった」という肯定的な回答が五割から六割程度、「受けていない」「覚えていない」という回答が一分から二割程度、「いやだった」「あまりに悲惨で苦痛だった」という回答が二割から三割程度である。回答者が国語科教育法の受講生であることを考えると、その他の人（教育学部や文学部以外の学部に進んだ人・大学に進学せずに就職した人など）が「いやだった」と回答する割合はもっと多いと推察される。

常に同じ内容の指導が続けられたら、「学習する前から結論はわかっている。自分だつて戦争は大嫌いだ。もう平和学習を受ける必要はない」と思う学習者がいても不思議はない。

平成元年は昭和六四年である。昭和六四年の時点では、先の戦争が終わつてから四〇年以上の年月が過ぎていた。小・中学

校の専任教員で、従軍した経験をもつ人はわずかである。

教科書に掲載されている教材が被害者の視点からの文章ばかりであれば、そうしたことは別の発想で授業をしようとする人はそれほど多くない。何より、自分自身が児童・生徒として受けた平和教育の影響がつよいであろう。

そうした中で、新しい平和教育のあり方を示した教材があった。吉屋敬「アイム ソーリー」(教育出版・中三)である。

二〇歳のときにオランダに留学していた筆者(吉屋敬)が、街で見知らぬオランダの婦人に難詰される。その婦人は、第二次世界大戦で、日本人によって自分の家族が殺され、財産を奪われたという。筆者自身は戦争を経験したことがなく、その婦人が言っていることがほんとうのことかどうかわからない。その折りに筆者の口から出た言葉が「アイム ソーリー」だった。興奮していた婦人も落ち着きを取り戻し、筆者に対して「アイム ソーリー」と述べる。このような出来事の後、筆者は二〇年ほど、戦争について調べたり、他の人と話し合いをしたりしながら、あつたとき自分が発した「アイム ソーリー」という言葉が適切であつたのかどうかを考え続けるといふ内容の随筆である。

このような教材であれば、指導者も学習者とともに戦争について学ぶというスタイルをとりながら、戦争と平和とについて考えを深めていくことができる。戦争責任の問題も含め、結論は一つではないため、「学習する前から答えは決まっている」という状態ではない。

荒巻裕「平和を築く——カンボジア難民の取材から」(三省堂・中三)のように、第二次世界大戦ではない事例をもとに平和について考えるという教材も登場している。「アイム ソーリー」「平和を築く」は、新しい平和学習の展開を切り開く力をもった教材であるのだが、現在はともに教科書から姿を消している。

### 課題の力

「写真と言葉が生み出す世界——メディアリテラシー入門」(教育出版・中一)という教材がある。四枚のポスターが示しており、学習活動1として、「あなたの心にいちばんびったりくる詩のポスターはどれですか。ペアになって、その理由を話し合いましょう。」という課題が示されている。詩は、まど・みちおの「ポタン」で、これはすべてのポスターに共通している。

同じ詩であっても、異なる写真と組み合わせることで、その印象は大きく変わる。そうしたことを理解していても、実際に見ると、あらためてその違いが実感される。

これを起点として、形と内容とは決して無関係ではないこと、組み合わせ自体が一つの創造的な表現行為であることが了解される。

この教材では、次に学習活動2として、複数の写真を示し、折原恵の「カメラが見つめたニューヨーク」という文章のタイトルバックに入れるとしたら、どれを選ぶか、それぞれの写真と文章の関係を考え、読み手にもたらす効果を想像しながら、その理由をまとめるという課題を設定している。

さらに、学習活動<sup>3</sup>では、一枚の写真を示し、「時代劇」「日記」「小説」「実況中継」という設定で写真に関連した文章を書くように求めている。

現行の中学校教科書は、色彩やデザインが以前のものと比べて隔世の感を抱くほど美しくなっている。「写真と言葉が生み出す世界」のような教材と課題を思いつく指導者はどれほどいるだろうか。そうしたアイデアを思いついたとしても、実際に教材を作成できる指導者はどれほどいるだろうか。仮に一割ほどの人が独力でそうしたことができたとしても、九割の人には、そうしたことはむずかしい。人にはそれぞれ得手不得手があり、またすべての領域、すべての分野で常に新しいアイデアを出して教材化していくのは容易なことではない。

「写真と言葉が生み出す世界」は、「読むこと」の教材として位置づけられているが、「書くこと」の教材として魅力を感じる指導者も多いことだろうと推察される。課題が新しい学習活動を切り開く例の一つである。

### 終わりに

伯楽がいなければ名馬は存在しない。そのような意味で、理想の国語教科書は存在するとも言えるし、存在しないともいえる。

教室において、教科書は単独で存在しているのではない。教科書を中心としながら、学習者に合わせて資料を設定したり活動を設定したりして授業を作り出していく。指導者の力量に

よって、教科書は大きな可能性を示す。一方で、教科書に触発されて、指導者が授業を改善したり新しい指導を想像したりする。

教科書の可能性とは、たとえばそのようなところにあるのだろうかと考えている。

\*漢字については、旧字を新字に改めている。

(学習院中等科)